

高御座の「外観をイメージできる実物大模型」

高御座実物大模型製作の経緯 特別史跡平城宮跡第一次大極殿の復原整備事業が、平成13年度の事業着手から9年の歳月を経て平成21年度末で完了し、平城遷都1300年にあたる平成22年度に公開の運びとなった。これに先立ち、文化庁では平成20年度に「第一次大極殿正殿における内部展示手法等に関する調査研究会」(委員長：西和夫神奈川大学教授(当時)。以下、「調査研究会」と言う。)を設置し、そこで大極殿の内部空間の在り方を検討した。調査研究会は、大極殿の内部空間の展示についての報告を取りまとめ、その中で、「大極殿が本来持っていた空間の規模と機能の理解に資する展示とすること」「大極殿とその復原に関する総合的理解に資する展示とすること」を基本的な考え方とした。その上で天皇が大極殿における儀式の際に着座する玉座たる高御座については、「現在の調査研究の段階では「復原」としての位置付けは難しいが、大極殿の空間理解の重要性に鑑み、「外観をイメージできる実物大模型」の展示を行う。」との結論を示し、あわせて、製作にあたっての外観意匠は原則的に奈良文化財研究所(以下、「奈文研」と言う。)が平成8年度に製作した10分の1模型に倣い、実物大であることを考慮して必要な補強等をおこなうことを付帯した。

この報告を受けて、文化庁文化財部記念物課(以下、「記念物課」と言う。)では、平成21年度に、高御座の「外観をイメージできる実物大模型」の実施設計を業者に委託し、その実施設計に基づく製作を別途業者に委託することとなった。記念物課は奈文研に対しても、実施設計及び製作にあたっての指導助言・協力を要請し、奈文研でもそれに応えることとなった。

10分の1復原模型 奈文研が製作した10分の1模型については、『年報1997-I』に報告されている。詳細についてはそれを参照されたいが、その復原に関する基本的な方針等の概略を述べておきたい。

10分の1模型の設計は、大正天皇の即位に際して新調された現存高御座に基づきながら、『内裏式』、『内裏儀式』、『文安御即位調度図』、『大内裏図考証』、『高御座勘物』所引の院政期古記録といった文献史料によって復原できる点をあきらかにし、後世の意匠を反映した部分に

ついては、できる限り奈良時代初頭に近いものに修正するという方針が採られた。主な仕様は以下のとおり。

軀体の平面規模は、下壇を一辺24尺の正方形、中壇を対辺距離18尺の正八角形、上壇を対辺距離15尺の正八角形とした。下壇には高欄を付け、下壇および高欄の形式は大極殿10分の1模型(平成8年完成)に倣った。また、昇高欄は平等院鳳凰堂中堂仏壇を参考にした。木階は現存高御座に倣い、背面を5級、両側面を3級とした。柱は中壇に立て、古代の八角円堂に倣い八角柱とした。柱間装置は前述のように正背面に帳、他6面には障子を2枚ずつ入れ、障子2枚は半蔀型とした。高さについてはいずれの文献史料にも記載がないため、3つの壇いずれも現存高御座の寸法をほぼそのまま採用した。また、下壇上端より蓋(屋根)の頂上(露盤の下)までの高さは、現存高御座のプロポーションに合わせて17.4尺とした。蓋の意匠も不明であるが、史料に玉幡が帽額から1尺とあり、軒の出を1尺とした。蓋の曲線は正倉院六角厨子残欠のものを採用した。蕨手は東大寺八角燈籠、露盤以上は法隆寺夢殿と東大寺八角燈籠の意匠を参考し、最上部に平城京出土遺物に倣った擬宝珠をおいた。下壇側面の格狭間の形状は、正倉院赤漆文欄木厨子の台脚を参考した。なお、単位尺は、1尺=29.54cmとした。

装飾品については、数量・大きさとも文献史料に沿い、デザインについては、正倉院宝物、法隆寺献納宝物などを参考にした。このうち、玉幡は法隆寺献納宝物広東綾幡等の形態を玉で製作し、玉の連ね方は阿武山古墳玉枕復原模型に倣った。敷物は各壇同デザインとし、帳と障子も同デザインとした。飾金物のデザインは、法隆寺金銅小幡の偏向唐草や奈良時代初期の軒平瓦文様などを参考にした。座については、畳ではなく椅子式を採用した。**実物大模型の規模と意匠** 実物大模型の製作では、その規模は10分の1模型で想定した寸法を採用した。また、軀体(下・中・上壇、蓋)、建具、調度、装飾品などその意匠の全般にわたって、原則的に上記の10分の1模型を踏襲することを基本とした。こうしたなか、大きく変更があったものについて、以下にあげておきたい。

蓋の露盤および蕨手上の鳳凰像については、10分の1模型では韓国忠清南道陵山里寺址出土の金銅製香炉の頂部につけられた鳳凰像(百濟・6世紀後半)の意匠をもとに製作されていたが、年代と用途の点での差異が問題で

あった。いっぽう、10分の1模型製作後におこなわれた平城宮跡東院庭園隅楼の復原の際に、屋根の頂部を飾る鳳凰について、平城宮跡出土の鳳凰文鬼瓦をもとに鳳凰像の検討が進められ、その成果に基づく鳳凰の製作がなされた。これらを受けて、実物大模型では、東院庭園隅楼の鳳凰をもとに、首を正面視する姿とするなど必要な変更を加えて表現することとした。

また、各壇側面の長押金物の文様については、法隆寺金銅小幡の偏向唐草などを参考にしていたが、復原大極殿で検討・採用された金物に準ずることとした。

敷物は、10分の1模型では、中国新疆ウイグル自治区のアスター211号墓出土の連珠團花文綾を採用したが、その連珠文内の文様が明瞭でなく、実物大にすることが困難であった。いっぽう、正倉院宝物の山岳花文長斑錦は、文様が明瞭で輪郭も円形に近く連珠文内の文様に容易に転換できることや、装飾性が高く見た目にも美しいことから、これを連珠文内の文様として採用した。

さらに、帳については、10分の1模型では、障子と同じく、法隆寺献納宝物紫地双鳳連珠円文錦裂をもとにしていた。しかし、帳が正面にくることから、装飾性を強調するとともに、天皇の権威を象徴的に明示する仕掛けが必要と考えた。古来、天皇・皇帝の象徴であった龍をデザインした正倉院宝物、法隆寺献納宝物、アスター墳墓の出土品などで知られる双龍連珠文綾を範とし、正倉院宝物赤漆欄木胡床をもとにした椅子の背面に置かれた几帳も同じ文様とした。

なお、敷物・帳・障子等の布地の色彩については、正倉院宝物の色彩をもとに、その経年的な変色を考慮した色彩を推定して採用した。

実物大模型の構造・材料等 車体、建具、調度、装飾物などの構造・材料等については、復原第一次大極殿内に設置する「外観をイメージできる実物大模型」という位置付けに基づいて対処した。車体については、下壇床は12分割できる床板パネル方式を採用、中壇も八角形に合わせた8枚の床板パネルを組み、上壇床は根太組とした。柱は、上壇床上に置いた中壇の土台上面に枘穴を穿って柱の枘を差し込み、外側から地長押で押さえた。部材の組立てにあたっては、必要箇所に構造用ボルトを使用した。木材は地檜（日本産のヒノキ）の他に強度のある集成材を用い、塗装は漆塗りの代替として広く用いられるカ



図64 復原第一次大極殿に置かれた高御座の実物大模型

シュー塗りとした。また、鳳凰は本来的に鋳物が想定されるが、重量等の関係もあり、木彫・箔押しを基本にして、部分的に真鍮・金メッキを併用した。

また、布関係については、敷物は絹の六本綾地（大和地）、敷物以外の布は絹の三綾地（錦地）とした。

高御座の位置 奈良時代の高御座が大極殿のどの位置に設置されたかについては、明確な根拠を持つ学説はない。ただし、容易に想像できるのは、高御座の南北方向中心線が、大極殿を東西に二分する南北方向の中軸線上に乗っており、そこから東または西にずれることはなかったであろうということである。それでは、南北方向中軸線上のどの位置に高御座の中心があったのか。内田和伸は、大極殿前面の埠積基壇の平面位置から推定して、宇宙の根源たる太極を示すものとして設定された高御座の中心位置は、大極殿建物の中心点から北に約2.3mの点にあたるとする。これは仮説の域を超えるものではなく、かつ、実物大模型で想定した規模の高御座をこの位置に置くと柱と当たってしまう。いっぽうで、大極殿の内部空間が儀式の場として用いられたことに鑑みれば、高御座の前面（南面）に広がりを持たせた可能性は小さくない。これらのことから、高御座の中心位置は、大極殿南北方向軸線上でその中心点から85cm後方（北）に設定した。なお、この数値は、身舎の北柱列の礎石の北辺延長線上に高御座北階段の北端を合わせたことにより結果的に生じたもので、特別な意味を持つものではない。

おわりに 以上に述べたような経緯や手法等をもって製作された「高御座の外観をイメージできる実物大模型」は、復原された大極殿の中心をなす存在として、調査研究会の示した「大極殿が本来持っていた空間の規模と機能の理解に資する」という展示方針に大きく寄与することになろう。
(小野健吉・加藤真二・箱崎和久)